

韓国江原大学校における「海外フィールド演習」のこころみ

田川公太朗・永松 大*

Pilot project of the "Overseas fieldwork" in Kangwon National University, Korea

TAGAWA Kotaro and NAGAMATSU Dai

キーワード：春川市，海外地域調査，大韓民国，学術林，再生可能エネルギー

Key Words：Chuncheon-si, Fieldwork in foreign countries, Republic of Korea, Research Forest, Renewable energy

I. はじめに

国際交流は，鳥取大学の3つの教育研究目標「教養豊かな人材養成」「地球的，人類的，社会的課題解決への先端研究」「地域社会の産業・文化への寄与」を実現するために必要な基本的目標の一つである（鳥取大学 2010）。教育，研究にかかわる大学の国際化のためには，海外の大学等との学術交流を一層促進し，学生交流の実質化，教職員間の共同研究など相互交流を活発化させることが必要である。鳥取大学が大学間協定を結んでいる海外の大学は2010（平成22）年2月現在で23カ国65機関あり，この他に部局間協定を結んでいる大学が7カ国11機関存在する（鳥取大学国際交流センター 2010a）。

筆者らは，非公式ではあるが「地域学部国際交流体系化プロジェクト」を立ち上げ，地域学部と交流協定を結んだベトナム・フエ科学大学について，昨年度，学術交流展開に向けたシーズ・ニーズ調査を行った。フエ科学大学の紹介と交流活発化に向けた今後の展望についてとりまとめ，報告をおこなった（永松ら 2010）。この中で永松らは，地域調査のスキルを習得した地域学部の学生に海外での「地域」調査や活動の機会を提供することを提案した。海外の「地域」を観察する，理解する，交流するという点に視点を置き，現地教員による講義とエクスカージョンを中心とした短期のプログラム「海外地域調査入門」（仮称）を新たに設ける構想である。

フエ地域は世界文化遺産の王宮と東南アジア最大のラグーンを持つなどの特徴を持ち，地域学部の海外実習に適していると判断されたが，一方で海外実習実現のためには交流拠点・内容の多角化，アジアの他の国々での実現可能性をさぐる必要性も感じた。このような状況下，地域学部が主体となってとり組んでいる第4回北東アジア大学教授協議会（4th Annual Conference of Northeast Asia Professors Association, NAPA2010）が2010（平成22）年5月17-18日に韓国・江原大学校で開催された。田川と永松はこれに参加し，韓国江原道春川市および江原大学校をはじめて訪れた。協議会ではエクスカージョンが催され，春川市郊外の自然や平和ダムを見学する機会を得た。永松は自らの専門分野である森林が当地で予想以上によく保護され良好な状態であることを見いだし，学

* 鳥取大学地域学部地域環境学科

生実習を含めこれをより詳しく調査する機会を持ちたいと考えて帰国した。また、田川は第1回北東アジア大学教授協議会にて中国東北部の風力エネルギー利用に関する発表を行ったことに関連して、韓国における再生可能エネルギーの導入状況について調査する機会を探していた。

2010(平成22)年5月28日午後、「いなばの手づくりまつり」に参加する江原大学校の学生を引率して、李悠(Yi Yu)教授が来学された。李悠教授は国際交流に熱心で、特に日本との交流実績が豊富である。矢部地域学部長のとりはからいにより、永松と田川は、江原大学校での学生実習の可能性について意見を交換するため、地域学部を表見訪問した李悠教授と会合をもつことができた。筆者らは、地域環境学科の地域調査実習のとりくみについて説明し、李悠教授に江原大学校をベースとした海外学生実習の実現に協力をいただきたい旨の提案をおこなった。内容も未整理な即席の提案であったにもかかわらず、李悠教授からは非常に積極的な受け入れの意志表示をいただいた。日本と生活習慣の近い韓国での実施と国際交流の経験が豊富な李悠教授のサポートは、海外実習を試行するにたいへん好ましい条件と考えられた。矢部地域学部長の賛同とサポートおよび若国際交流センター長のアドバイスを受けて、8月に韓国・江原大学校をベースにした海外実習を試行することが合意された。地域学部国際交流体系化プロジェクトは主に地域政策学科と地域環境学科の教員が中心となっているが、企画の経緯と準備状況から、今回の試みは地域環境分野にしばって試行することとした。

このような背景を受けて、筆者らは2010(平成22)年度地域学部学部長裁量経費「韓国・江原道における海外地域調査実習の試行」を申請した。韓国・江原大学校をベースとした「海外フィールド演習」は2010(平成22)年8月22日から8月29日の8日間に実施された。本稿では実習の企画から準備までの過程、実習内容とその成果等について詳細に報告し、国際交流活発化に向けた海外地域調査実習の今後の展開について述べる。

II. 実施地域の概要

1. 江原道と春川市の概要

江原道(Gwangwon-do)は朝鮮半島中央部の東側を占め、南北240km、東西150kmほどの広がりがある(図1)。面積は約17,000km²、これはほぼ鳥取県と岡山県、兵庫県をあわせた面積(約19,000km²)に匹敵する。全体に山が多いため人口密度は低く、総人口は約160万人である(Gangwon Province 2010)。東側は日本海に接し、西側はソウルに向き合っている。道庁のある春川市(Chuncheon-si、約27万人)の他に南西部の原州市(Wonju-si、約31万人)、日本海側の江陵市(Gangneung-si、約22万人)など7市と11の郡からなる。江原道は日本の東北地方南部と同緯度に位置し、積雪がそれほど多くないことを除けば気候条件は日本の東北地方に似ている。切り立った花崗岩の岩峰が連なる雪岳山(Seorakusan)や五台山(Odaesan)などの景勝地が有名である。



図1 江原道と春川市の位置

鳥取県は環日本海交流の一環として中国やロシア、モンゴルの自治体と友好提携を結んでいるが、中でも江原道と活発な交流を行ってきた。江原道とは1994年に友好提携を結び、青少年交流をはじめ文化芸術、環境、農業、経済等の各分野で交流が進んでいる。2009年には鳥取県と江原道を直接結ぶ環日本海定期貨客船が境港市と東海市(Donghae-si、約10万人)の間に就航し、さまざまな分

野での友好交流の発展が期待されている。鳥取大学も交流の一翼をになうことが期待されている。

春川市は江原道の北西部に位置しており、道行政の中心都市である。春川はソウルを流れる漢江（Han-gan）の上流部にあたり、北朝鮮側から流れる北漢江（Bukhan-gan）と雪岳山から流れる昭陽江（Soyang-gan）が合流する春川盆地に広がっている。ソウルから東に約90km、車で2時間弱の距離にある。春川の街の周囲には昭陽ダム、春川ダム、衣岩ダムなどのダムが造られ、人工の湖が市街地を取り囲んでいる。これを活かして、水と緑の街として多くの人々が訪れる観光地として人気が高まっている。2009年にソウルとの間を結ぶ高速道路が開通、ソウルと結ぶ鉄道、京春線の高架・直線化工事が進むなど、近年交通アクセスが飛躍的に改善されつつある。日本人にとっては、テレビドラマ「冬のソナタ」のロケ地としても有名である。

2. 江原大学校の概要

江原大学校（Kangwon National University）は、1947年に春川市立農業大学として創立され、その後、1970年に江原大学校となり、1978年に総合大学となった（図2）。人文社会科学（7学部28学科）、自然科学（10学部）、工学（2学部）、芸術スポーツ（1学部、1部門）、医学（2学部）、および異分野融合分野（5部門）の6領域（22学部、6部門）から構成されている。2009年度の学生総数は約23,100人（学部生約20,000人、大学院生約3,100人）である。

鳥取大学と江原大学校との学術交流協定は、1996年から始まった。現在、交流の中心部局は工学部であり、両大学の教員における研究交流をはじめとして、2007年から開催されている北東アジア大学教授協議会への教職員派遣、2003年より毎年実施されている工学部主催の日韓学生交流環境セミナー、短期語学研修プログラムや単位互換制度による交換留学制度等による学生交流等、多岐にわたっている。1996年から2009年に至るまで、鳥取大学からの派遣人数は115名（教職員43名、学生72名）、受入人数は113名（教職員26名、学生87名）に達しており、豊富な交流実績を有している（国際交流センター、2010b）。

地域学部には、江原大学校から日本の文化や語学を学びに特別聴講学生として1年間留学する学生が多く、この7年間で21名を受け入れている。一方で、鳥取大学から江原大学校へ1年間留学した地域学部の学生は1名である。学生6名を派遣する今回の実習は、地域学部における江原大学校との国際交流の活性化に貢献するものである。



図2 江原大学のキャンパス風景

表1 準備スケジュール

日付	内容
2010. 5. 28	海外フィールドワークの今夏実施が決定
6. 8	地域環境学科科学科会議にて実施が承認
6. 18	李悠先生に実施計画を送付 李悠先生とのメールによる打ち合わせ開始 (8月までに往復50通超)
6月下旬	実習日程の確定 参加学生の募集開始
6. 3	学部長裁量経費に応募
7. 12	参加申込み学生6名の面接実施 参加学生の決定（6名とも）
7月中旬	航空券の手配・確定 宿泊場所、移動方法、実習の中身等について 随時打ち合わせ
7. 23	海外渡航前危機管理セミナー（国際交流課主催）への参加
8. 18	参加学生の事前指導
8. 22	出発（関西空港に各自集合）

III. 海外フィールド演習の実際

1. 実習の設計

表1に「海外フィールド演習」の準備スケジュールを示した（前頁 参照）。フィールド演習の実施は前述のとおり5月28日に決定し、江原大学校との打ち合わせなどの実質的な準備はこのときからスタートした。「海外フィールド演習」はボトムアップ型の提案であったため、まず永松と田川が所属する地域環境学科に実施の了承をとることから行動を開始した。計画の骨格をつくりあげ、6月8日に開かれた地域環境学科の学科会議に議題として提案した。この時点で、田川と永松が学生を引率することを決定し、大まかな日程と実習分野（再生可能エネルギーと森林環境）などの計画概要を用意し、実施に向けた学科の承認を得た。実施経費は学部長裁量経費に応募した。

江原大学校側の受け入れ準備は李悠教授に全面的にお願いすることとなった。引率する田川と永松は春川市を一度訪れたことがあるとはいえ実習拠点や対象地の選定は困難で、具体的なアイディアは李悠教授にお知恵をいただいた。今回は「海外フィールド演習」の実現可能性をさぐる「試行」であり時間的な余裕もなかったため、両大学における国際交流の窓口となる部局を通さず、主に李悠教授と永松の間の個人的なやりとりによって準備を進めた。

学生の滞在は、費用負担軽減のため当初江原大学校本部の学生寮を想定していたが、同時期に江原大学校で大規模な国際学会が開催される関係で使用することができなかった。実施期間の変更も検討したが、江原大学校側の新学期開始（8月30日）と日本側の都合のため、これを変更することは困難だった。李教授のご尽力の結果、今回の実習では江原大学校山林科学大学の学術林（演習林）宿舎に宿泊できることとなった。江原大学校から少し離れていることが気がかりであったが、あとに述べるように、学術林宿舎での合宿生活は結果的にはたいへん実りあるものになった。

今回の試行では、地域環境学科3年生を対象に、「海外フィールド演習」への参加を募った。地域環境学科の3年生は、2年次の1年間調査実習を受講している。3年次前期には、実習内容と成果を取りまとめ地域住民の方々に発表する「成果報告会」の開催と「成果報告書」の刊行を経験している。彼らはプレゼンテーション能力や地域調査力等の基礎的素養を身につけており、これらのスキルが海外でも応用可能であることを学生に理解および体得させることに適していると考えた。

7月5日に地域環境学科3年生が研究室配属に関する会合に集まったことを利用して、「海外フィールド演習」（試行）の趣旨を説明し、募集人数5名程度として参加者を募った。申し込みの期限は1週間とした。6名（男4人、女2人）の応募があり、7月12日に動機や意欲などを確認する個人面談を行った結果、この6名全員の参加を決定した。参加学生の地域調査実習（2年次）における実習分野の内訳は、田川が担当したエネルギー分野2名、永松担当の森林環境分野1名、地形地質分野2名、および歴史環境分野1名であった。

今回の参加学生は、6名全員に海外渡航の経験が無かったため、パスポート取得から準備を開始した。パスポートの取得手続きについて学生個人に指導をおこない、7月中には全員がパスポートを取得した。並行して引率者側で韓国への航空券を手配し、学生の費用負担軽減を考えて安価な航空券を確定した。学生は、基本的に私費での渡航であったが、教育振興尚徳会・地域学部助成会による留学支援金を申請し、1人あたり3万円の支援金を頂くこととなった。宿泊場所、移動方法、スケジュール、実習内容等について、教員および学生間で随時打ち合わせを行い、8月18日に事前指導と最終確認を行った。

今回の海外実習に係る危機管理上の手続きを行うにあたり、鳥取大学が作成している「鳥取大学国際交流危機管理マニュアル」および「国際交流センター事業に係る学生の海外研修・海外留学等

における危機管理上の手続き」を参照した。参加学生全員が海外渡航届および海外安全対策届を作成し、地域学部教務係に提出した。これら書類の手続きを通して、海外渡航に関する家族の了解、学生教育研究災害傷害保険や海外旅行傷害保険への加入、定期健康診断の受検、外務省海外安全ホームページ、厚生労働省ホームページ、感染症情報センターホームページでの危険情報レベルの事前確認を行った。さらに、鳥取大学国際戦略企画推進本部事業の一環である、学生の海外派遣に向けた渡航前危機管理セミナーに参加した。7月23日に開催された「海外渡航での健康管理について」では、海外で気をつけたい病気とその予防について説明を受け、7月30日に開催された「海外で起こり得る事件事故と防止策について」では、海外で想定されるトラブルの事例やトラブルを未然に防ぐための心構え、万一トラブルに巻き込まれた場合の対処法などについて事前勉強した。引率教員は緊急連絡網を作成して地域学部教務係に提出し、危機管理体制の構築を図った。

2. 実習の実施

韓国・江原大学校における「海外フィールド演習」（試行）の実習内容とスケジュールを表2に示した。以下、実習内容と実習生活について紹介する。

表2 江原大学校における海外フィールド演習（試行）の実習内容とスケジュール

日付	内容
8月22日（日）	鳥取出発～関西空港（それぞれ、関西空港12:30集合） 関西空港～金浦空港（ソウル） JAL 973 15:15～17:05 金浦空港～春川市 李悠教授送迎、江原大学公用車（12人乗り）使用 宿泊：学生-春川市内ホームステイ（二人ずつ） 教員：江原大学内ゲストハウス
8月23日（月）	午前：江原大学内見学、関係部局表敬訪問 午後：自然エネルギー講義（IT学部：Kim Kwangho教授） 実習内容打合せ、準備 移動：江原大学中型バス（運転手手配） 宿泊：江原大学学術林宿泊施設（洪川市、春川市内から片道約42km）
8月24日（火）	現地調査（エネルギー施設調査） 午前：春川水力発電所、Soyangangダム見学、調査 午後：京畿道清平揚水発電所見学、調査 移動・宿泊は前日と同じ
8月25日（水）	現地調査（自然環境調査） 午前：江原大学学術林本部（洪川市）訪問 Park WanGeun教授の講義と演習林内案内、調査 午後：江原道自然環境研究パーク（洪川市）訪問、展示見学 移動：江原大学大型バス（大学側都合、運転手は変更なし） 宿泊：前日同様
8月26日（木）	現地調査続きと調査結果のまとめ 午前：江原道自然環境研究パーク、野外ビオトープ見学・調査 午後：プレゼンテーション準備 宿泊は前日と同じ、移動なし
8月27日（金）	午前：調査内容のプレゼンテーション（英語使用：2グループ） 午後：春川市内見学 （教員は、江原大学Yun Hee.jong先生とミーティング） 移動：江原大学大型バス 宿泊：学生-春川市内ホームステイ 教員-江原大学内ゲストハウス
8月28日（土）	午前：ソウル移動（私用車2台） 午後：ソウル市内関係ヶ所見学 移動：公共交通機関 宿泊：ソウル市内ホテル
8月29日（日）	帰国 金浦空港～関西空港 JAL 972 12:25～14:10 関西空港～鳥取（or実家）

韓国入国とホームステイ

実習初日（8月22日）、出発は関西国際空港に集合とした。集合後に空港内で日本の出国手続き、韓国への入国手続き等について説明をおこない、全員がスムーズに韓国に入国した。金浦空港で李悠教授の出迎えを受け、教授の運転で春川市に移動した。約2時間で春川市に到着後、歓迎の夕食会に招かれた。学生はこの日、地元の家庭にホームステイすることになっており、夕食会にはホストファミリーも出席いただいた。ホストファミリーは大韓剣道会春川市剣道会の方々と、交流事業で過去に鳥取県を訪問した経験があり、学生を快く受け入れていただいた。学生は食事後3組に分かれ、それぞれのホームステイ先に宿泊した。学生にはホストファミリーにそれぞれお土産を持参するよう事前に指導した。学生6人がすべて海外初体験のため、実習初日のホームステイには教員側も不安があったが、調査実習などを通じて参加学生の適応力はある程度把握できており、李悠教授のきめ細かなご配慮もあってこれを実現することができた。

江原大学校訪問

実習2日目（8月23日）、江原大学校本部を訪問し、李悠教授の案内でまず学内を見学した。学生たちに韓国を実感させるとともに、鳥取大学と江原大学校について自分の目で比較させることを目的とした。また本実習あるいは将来の実習における大学図書館の蔵書活用を企図して、図書館に案内してもらい、開架図書の見学をさせていただいた。ほぼ全てがハングルで書かれた本であったが、中には日本語の文献も配架されていることが確認できた。

江原大学校のキャンパスは緑豊かであった。徒歩で広い学内を巡るにつれ、学内各所に植栽されている造園木の多くが、日本との共通種であることが確認できた。樹種については学生にもいちいち確認させ、実習の最初の成果となった。

再生可能エネルギー利用に関する実習

実習2日目（8月23日）の午後、李悠教授のコーディネートにより、江原大学校情報技術大学電気電子工学科のKim KwangHo 教授による、「江原道における再生可能エネルギーの現況」と題した英語による講義を受講した。太陽光、風力、水力発電など韓国における再生可能エネルギーの導入状況、江原道の再生可能エネルギー導入量が韓国国内で占める割合、江原道におけるエネルギー消費量の推移などについて、質疑を交えながらわかりやすく説明していただいた。スライドによる説明後、学生の方から積極的に英語で質問するようすも見られた（図3）。



図3 講義での質問風景

実習3日目（8月24日）は、江原道における再生可能エネルギー利用に関する具体的な事例として、江原道を通る漢江流域の豊富な水資源と地形的特徴を活かした水力発電に関する実地調査を行った。そこで、春川水力発電所、松陽江ダムとその水力発電所、および清平揚水発電所を訪問した。また、再生可能エネルギー設備の導入普及に取り組む地元企業も訪問した。

午前には訪問した春川水力発電所は、韓国水力・原子力発電株式会社（Korea Hydro & Nuclear



図4 発電所内に展示された水力タービン



図5 Samyan Ecoenergy 株式会社の見学

Power Co. Ltd) によって運営されており、漢江流域に5か所ある水力発電サイトの1つである。副所長であるCho KyungSok氏に発電所全体の概要について説明していただいた後に、発電機が設置されているフロアや発電所の制御室を見学した。この発電所は、水流の落差が20mであり、総出力56MW（28MW出力の発電機2基）の発電出力であった。学生は、発電機を導入した企業が日本の電機メーカーであったことに驚き、改めて日本の技術の高さを確認したようであった。また、実際に使われていた水力タービンも展示されており、その大きさに驚いていた（図4）。

午後には、清平揚水発電所を見学した。この揚水発電所は、江原道の西隣にある京畿道に位置しており、韓国南部発電株式会社が運営している。この揚水発電所で使用されている水車タービンと発電機も日本の電機メーカーによって導入されており、出力40万KW（20万kW発電機×2台）である。揚水発電を行うための上池と下池の標高差は約500mであり、それぞれの池をつなぐ導水管の長さは約730mであった。上池の貯水状況を見た後に、揚水発電所を訪問した。発電所の事務所では、Park JuHwan所長に出迎えていただいた。簡単な概要説明の後、案内スタッフとともに地下約350mの位置までトンネルを下りていき、発電機や水車を納めた地下建物内を歩いた。実際に発電している状況で、高速で回転している水車の軸を見ることができた。

また、発電所へ移動する途中でSamyan Ecoenergy株式会社を訪問した。この会社では、主に地中熱を利用したヒートポンプシステムの開発と導入に取り組んでおり、その仕組みと開発技術の概要について学んだ。会社内には、太陽熱集熱器や太陽電池セル、自動車用燃料電池の模型等が展示されており、また、敷地内に30kW太陽光発電システムを設置し、建物屋上に小型風力発電機を導入しているなど、再生可能エネルギーの導入・普及に係わる地元企業の取り組みの現状について知ることができた（図5）。

森林環境実習

実習4日目（8月25日）には、森林環境実習を実施した。午前中、我々の宿舎に近い江原大学校山林科学大学学術林の本部（洪川郡）を訪問した。この施設は日本の大学という演習林にあたる。学術林は1953年の設立で面積は3,146haを誇り、大学演習林として韓国ではソウル大学と並んで大きな規模である。これは例えば、鳥取大学の教育研究林・蒜山の森（573ha）の5倍以上の大きさにあたる。学術林内で最も高い山はMt. Daeryong（899m）で、平均傾斜20-25°ほどの斜面に森林が広がっている。地質は花崗岩である。気候的には夏緑性の落葉広葉樹林帯にあたり、半世紀にわたる保

護によって、土壌条件のよい場所を中心にモンゴリナラ *Quercus mongolica* やアベマキ *Quercus variabilis*, クヌギ *Quercus acutissima* を中心とした自然林が成立している。一部にはアカマツ *Pinus densiflora* の林もある。学術林は自然林が全体の75%, 人工林が25%を占め、人工林の多くはチョウセンゴヨウ *Pinus koraiensis* の林である。チョウセンゴヨウは葉が5枚ずつ束生する五葉松で、種子が食用になることで有名である。日本でも本州中部を中心にわずかに自生があるが、朝鮮半島から中国東北部、ロシア極東部のやや乾燥した寒冷地に多いマツである。



図6 山林科学大学学術林内での質疑応答

学術林の訪問は永松が事前に要望したもので、時間が十分とれないこともあり、室内での講義ではなく実際に森のようすを見学させてほしいと希望した。前夜から時に強い雨が降り、この日の午前も雨が降ったりやんだりのあいにくの天気で森に入れるかどうか心配したが、学術林本部では我々のために使い捨てのビニール製雨合羽を準備していただけており、大いに助かった。実習に参加した6人の学生のうち半数以上は折りたたみのカサさえ用意していなかった。日程の代替がきかない短期プログラムに野外実習を組み込んだにもかかわらず、雨天に備えた雨具の用意を徹底しなかったのは今回の大きな反省点となった。

学術林のスタッフに従って本部から森の中に入り、ときおり雨の降る中を40分ほど歩いて、学術林が誇る80年生のチョウセンゴヨウの美林を案内いただいた。この林は韓国で最も古いチョウセンゴヨウ人工林とのことで、江原大学校では大学のシンボルとしてチョウセンゴヨウを大学の木に選定している。学術林では山林科学大学森林資源学科のPark WanGeun教授と学術林の責任者の方に案内頂いた。森の中で途中Park教授と質疑応答を行い、学生からも多くの質問が出た(図6)。今回は引率教員の側の準備不足のため実習前の事前学習が足りず、当日の悪天候もあって学生にはあまり印象が良くなかったかもしれないが、それでも実際に森の中を歩いてみて、日本と共通する樹木が多いことを実感できたはずである。江原道の森林状況に関して大きな知見を得ることができ、今後の展開につながる成果を得た。

午後には、江原道自然環境研究公園 (Gangwon Nature Environment Research Park, 洪川郡) を訪問した。この研究公園は自然史系の展示施設と野外展示施設および研究部門で構成されている。日本でも研究機能を強化し野外展示施設に力を入れている自然史博物館はいくつかあるが、ここでは中山間地の谷沿いに数kmにわたって、さまざまなタイプの野外施設を設置しており、日本にはないスケールに圧倒された。研究公園では主要な外国語のボランティアガイドが組織されており、我々は日本語のボランティアガイドさんにお世話になった。当初の見学予定時間ではとてもすべてを回ることができず、この日は室内展示だけを見学した。昆虫標本など、日本の博物館施設との展示のしかたの違いが印象的であった。

我々の宿泊施設がこの研究公園に隣接していたことを幸いに、当初の予定を変更して実習5日目(8月26日) 午前に研究公園の野外展示施設 (ビオトープ) を見学した。広い園内の移動には10人乗りの電気自動車を利用した(図7)。電気自動車は初めてであったが、加速のよさが印象的であった。身近な水生植物の生態系を復元するための池、農業用のため池を利用した水鳥の観察施設、植物や天然材料を使った水質浄化試験地、焼畑生活の家、森林性昆虫の観察地、バタフライガーデンなど



図7 研究公園の電気自動車



図8 プレゼンテーションのようす

主要なものだけで8つの野外展示エリアがあり、環境教育の拠点として活用されているようですがよくわかった。この見学では林道を1kmあまり歩く機会を得て、韓国の山里景観をじっくりと観察することができた。

実習成果プレゼンテーション

エネルギー分野と森林分野の2つの実習を通して学習した内容について学生たちがまとめを行い、発表するプレゼンテーションを実習6日目に企画した。学生6人を3人ずつエネルギー分野と森林分野の2つに分け、それぞれについて15分間（1人あたり5分間）、英語でプレゼンテーションを行うこととした。当初計画では、実習5日目（8月26日）をすべてプレゼンテーション準備にあてる予定だったが、前述のとおり午前中をエクスカージョンにあてたため、プレゼンテーション準備は午後からとなった。学生たちは持参したPCを使ってMicrosoft PowerPointを使ったプレゼンテーションの準備をおこなった。事前に用意した資料、実習中に受けた講義や説明、パンフレット類、撮り貯めた写真、それにインターネット上で探し出した資料を使って構成と担当を決め、我々も指導しながら準備を進めた。我々の実習に同行しサポートしてくれた江原大学校学生のBae ByoungHanさんにも議論に加わってもらい、準備は深夜におよんだ。

実習6日目（8月27日）、江原大学校経営大学のセミナー室をお借りして、本実習成果を発表するプレゼンテーションを実施した（図8）。このプレゼンテーションには、経営学部の韓国人学生10名の出席を得た。また、この実習にあわせて江原大学校を訪問し、観光分野を専門とする教員との打ち合わせを計画した地域政策学科教員の相澤直子氏と中村英樹氏にも出席頂いた。

学生たちは、エネルギー分野では、学生たちが肌で感じた韓国と日本の生活習慣の違い、江原道における再生可能エネルギー利用の現状と、実習で訪れた発電所の概要等について、森林環境分野では、韓国と日本の文化の違い、日本と韓国の森林資源の現状、および日本と江原道の植物の類似性に関する発表を行った。学生にとっては全くはじめての英語プレゼンテーションであり、内容よりもまず進行のスムーズさに懸念があったが、学生たちは深夜におよぶ準備をおこなって英文原稿を用意し、韓国人学生たちのおかげで緊張感のある会場となったことも幸いして、予想以上によりプレゼンテーションとなった。韓国人学生からの質問が1件にとどまったのは残念であったが、実習に参加した学生たちは大きな達成感を得たものとする。



図9 山林科学大学の宿泊施設



図10 移動に利用した大学所有の大型バス

実習中のようす

実習期間を通して、李悠教授の研究室の学生であるBae ByoungHanさんが同行し、実習期間中の宿舎での生活から実習活動にいたる様々な場面で我々をサポートしていただいた。

実習2日目から6日目の宿泊は、江原大学校山林科学大学学術林の宿舎を利用した(図9)。施設は春川市から42km、車で40分ほど離れた山の中にあり、毎日の移動には、江原大学校所有のバスを利用した(図10)。バスに乗ったのは参加学生と引率教員、李悠教授と同行した韓国人学生とで10人ほどと少なかったが、荷物が多く移動が長めであったこともあり、スペースに余裕のあるバスはありがたかった。バスの支払いは大学構成員がバスを借りた時と同様に計算していただき、ガソリン代と運転手さんの手当ての一部として34.5万ウォン(約2.5万円)を支払った。

学術林宿舎では自炊する必要があった。実習前はこの点が不安材料であり、実際に食料の買い出しや食事の準備にある程度の時間をとられたが、食料の買い出しは食材や陳列のしかたの違いを知るよい機会となり、韓国人学生と協力しながらの食事準備は互いの理解のために得るものが多かった。宿舎は新築されて5年ほどとのことで、調度類は新しく清潔で、全員が気持ちよく滞在できた。海外初経験の学生たちにとって、自炊により朝食と夕食を自分たちのペースで取ることができたのも体調管理にプラスに働いたのではないかと感じた。ネットワーク環境も整備されていたおかげで、プレゼンテーション準備も順調にすすんだ。学術林宿舎の宿泊料は、大学側のご厚意により規定の半額にいただいた。そのため、学術林宿舎の宿泊4泊とその間の計9回分の食費は8名分の合計で80万ウォン(約6万円)でおさまった。李悠教授の綿密な根回しもあって、初日の歓迎会を始め、3日目、4日目、6日目の昼食は大学関係者や日本との交流に積極的な方々に接待いただいた。学生たちは韓国の代表的な料理に接することができ、韓国文化の理解が進んだものと思う。

実習6日目(8月27日)の午後、プレゼンテーションを終えた学生たちは、Bae ByoungHanさんをガイドに、春川市内にて自由行動とした。市内見学後、自由に夕食を取った後に大学に集合させた。当初計画ではこの日も学術林宿舎に帰る予定であったが、次の日の移動時間短縮と費用圧縮を考えて、初日と同じホストファミリーにホームステイさせていただくことになった。春川滞在中、ホストファミリーとは何度か一緒に食事をする機会があり、ホームステイについては学生たちも初日のような不安はなかったものと思う。引率教員は午後、観光開発と景観が専門のYun HeeJeong博士と今後の交流について懇談をもった。

実習7日目(8月28日)は春川からソウルに移動し、ホテルにチェックイン後、午後半日を自由行動とした。学生たちは地下鉄でソウル中心部に移動し、連れだって明洞周辺を見学したようであった。この日も夕食は自由に取らせ、夜ホテルに無事帰着したことだけを確認した。実習最後の夜にあたり、学生たちはホテル帰着後も一室に集まって、韓国での一週間を夜遅くまで振り返っていた。

ようだった。

3. 実習の成果

今回コーディネートをいただいた李悠教授には、実習スケジュールの管理はもちろん、江原大学校内で事前に我々の専門と近い研究者を探していただいた。山林科学大学で学術林を案内いただいたParkWanGeun教授は分類学や年輪年代学がご専門で、日本に留学経験がある。大学院は永松と同窓で、共通の研究者仲間があることがわかりたいへん心強く感じた。森林環境実習について今回は計画時から見学のみと決め調査道具を持たなかったが、次の機会にはぜひ学術林の林内での実習を計画したい。情報技術大学のKim KwangHo 教授は、電力工学を専門としており、再生可能エネルギーによる発電電力の送電技術について研究している。田川の研究分野とも関連することから、今後の情報交換についても協力してくれるとのことである。

実習を実施する教員の専門分野と近い、江原大学の教員と連携するきっかけを作ることができたことは、今後の実習の進展につながる成果である。この連携を活かして、江原大学校の学生と共同での実習が実現できればさらに教育効果は上がるであろう。将来的には教員同士の共同研究につながることを期待したい。

帰国後、学生から実習に参加しての感想および意見を提出してもらったので、教育効果の一つとして紹介したい。まず、参加した学生全員にとって初めての海外を経験したこともあり、「今回のプログラムで初めて海外に行って、日本との文化や風土、言葉などの違いを肌で感じる事ができた。」「韓国の人々は実に情が深く、人と人との間に壁があまり存在しないということを知りました。来客者に対して、日本では考えられないほどの厚いもてなしを行うことや、見ず知らずの人に対して、あたかも以前からの知人であったかのように接しているのを目の当たりにし、とても驚きました。」「本場韓国料理の辛さに驚いた。」等、食事やもてなし方、挨拶など日本と韓国の身近な生活習慣の違いについて大きな驚きと印象をもったようである。

実習の内容については、「日本で行っていた調査実習だけでは分からないような海外での事例などを、直接自分の目や耳で調査することができ視野や考えが広がったように思える。」「日本の新エネルギー発電技術（特に太陽光発電）は専ら世界的に進んでいることもわかった。国内での比較は日本で学ぶ機会があるが、世界レベルでの日本の位置は海外に来てわかるという面から、相対的に物事を比較する上で視野が広がったように感じた。」「韓国と日本の森林形態はほとんど差異がなかった。ただ、植林する樹木の種類が異なる点、その樹木に商業的な要素を含んでいる点などが日本と異なっていた。」等の感想が得られ、発電所の視察や演習林での現地調査から、両国における発電技術や森林環境の共通点や相違点を考えることができたようである。さらに、前述したように現地の学生に対して実習内容に関するプレゼンテーションを英語で行ったことについて、「日本語でも大変なことを英語でするということで、準備には多くの時間がかかりましたが、大学の中でめったにすることができない体験をできてよかったです。毎日朝起きてから夜寝るまでが勉強になる生活でした。」「英語でプレゼンテーションすることがこんなに難しいんだと初めて分かりました。このような体験は、日本にいたら経験することがなく、外国ならではの経験をすることができてとてもよかったです。」「今回の実習で最も印象に残ったことが、調査結果を韓国の学生に英語でプレゼンテーションすることだった。今までにプレゼンをしたことは何回もあるが、英語で発表したことはなく、プレゼンの準備段階から発表まで悪戦苦闘した。それでも何とかプレゼンを形にすることができ、とてもいい経験ができたと思う。」等、英語で発表することが学生た

ちにとって大きな試練となる一方で、学生自身がこれまでに習得してきた英語の語学力を確認する良い機会となった。しかし、「もう少しプレゼンの準備時間があれば、もっと完成度の高いプレゼンができたと思う。」「一つ心残りのことは、事前の韓国語の勉強が不十分だったことである。個人での勉強はもちろん必要であるが、全体での勉強会が何回かあってもよかったと思う。」などの意見もあり、事前準備の必要性や実習スケジュールを計画する上で改善すべき点があることもわかった。

最後に、実習に参加したことを振り返って、「韓国という異文化に触れ、韓国を知ると同時に日本を改めて知ることができた。このプログラムは我々学生にとって、少し大げさだが、世界を見るもしくは世界を見ようとする意欲を掻き立てる貴重な機会であったと思う。」「この実習に参加したことによって以前にもまして、海外への興味関心が増しました。」「韓国の人々との交流も難しかったですが、それ以上に学ぶことが多くあり、広い視野を持つことが少しは持てたと思います。今回の実習を活かして、英語や卒論、人生をより充実したものにしていきたいです。」「今回の実習では調査実習としてだけではなく、人間としても良い経験ができ成長したと思っている。今後このような実習があればまた参加したいと思うし、またこのような実習をもっと増やしてより多くの大学生に体験して欲しいと思った。」等、実習に参加しての充実感と今後の勉学に対する意欲、海外への興味・関心を高める効果があったことがうかがえる。

IV. 課題と今後の展開

今回、主に地域政策学科と地域環境学科の教員が中心となって非公式に立ち上げた「地域学部国際交流体系化プロジェクト」の一環として、韓国・江原大学校をベースに1週間の日程で地域環境分野を対象とした海外実習を計画・実行した。今回の実習は、地域学部における「海外フィールド演習」の実現可能性をさぐることが目的であった。実習内容としては再生可能エネルギー利用調査と森林環境実習を試みた。前述した学生の感想や意見からも、このような海外教育プログラムの実施は、学生の勉学意欲や海外地域への興味・関心を高める効果が期待できることが確認できた。

将来構想の一つとして国際戦略の強化を図る地域学部にとって、「海外フィールド演習」は学部理念を具現化した魅力的かつユニークな教育プログラムとなりうる可能性を秘めている。中国、韓国、ベトナムなどアジア地域の学術交流協定校と連携した「海外フィールド演習」は、地域学部の国際交流活性化と学生教育の充実・深化を図る上で大きな効果をもたらすものと期待できる。

そこで今後の参考として、「海外フィールド演習」の試みを通して得られた課題について述べたい。まず、このプログラムの実施体制をどのように構築するかということを検討する必要がある。今回は海外実習の構想から準備、実施までの期間が短かったため、江原大学校・李悠教授の個人的なつながりを頼りに実習を実施したが、李教授と永松、田川の専門分野は全く異なっており、このままの体制でこの実習を継続すると李教授に負担をかけるばかりになってしまう。より専門的かつ具体的な実習内容を計画するとともに、同じ専門分野を学ぶ学生同士の交流を深めるためにも、両大学の同じ専門分野の教員同士のもとで実習を実施することが望ましい。そのためには、教員、学科、学部レベルでの積極的な学術交流が必要である。今回の実習期間中に、海外実習の実施に関心をもつ地域政策学科教員の中村、相沢両氏が江原大学校に視察に来られた。両氏は、学生の英語プレゼンテーションを見学するとともに、観光経営学科所属観光開発や景観が専門のYun HeeJeong 博士と打ち合わせをおこなった。地域政策学科の研究分野における実習実施の可能性について検討していただいたことは、江原大学校におけるフィールド演習の継続とひろがりの最初の一步になるも

のと期待する。

対象とする学生について、今回はすでに地域調査実習を終えて、地域調査力等の基礎的素養を身につけた3年生を対象とした。これは、調査実習で習得したスキルが海外の地域でも応用可能であることを学生に理解および体得させることを想定したからである。調査実習を経験していたことのメリットは、例えば今回のプレゼンテーション準備に発揮されるなど一定の効果があつたが、実習内容の点では、勝手の違う海外で「調査実習の発展形」という内容で3年生の実習を行うことは容易でないように感じられた。また、海外での実習を国内の地域調査実習の発展形として扱うには、同一の学生が国内と海外とで同じ分野の実習を経験し両者を比較することが望ましいが、これは参加学生を極端に限定してしまうことにつながり、実質的には困難である。学生の感想からも海外地域自体への興味・関心、語学力の重要性の認識、専門分野に対する勉学意識を向上させる効果が期待できたことから、「海外フィールド演習」を例えば1年次などの早い時期に実施することにも大きな意義があるように思われる。

海外に学生を連れて実習を行うためには、予算的な裏付けも必要となる。今回は学部長の後押しにより、学部長裁量経費による引率教員の渡航費用捻出と江原大学校への経費支払いができたが、引率2名、8日間の日程で50万円超の予算を必要とした。このこころみを単年度で終わらせず、継続するとともに拡充していくためには、より大きな予算的な裏付けが必須である。議論と小規模な試行を重ね、今後カリキュラム化について学部内のコンセンサスを得るとともに、全学的な理解を得て文部科学省が設けている教育改善のためのプロジェクト等に応募する必要があるだろう。

今回は、時間が足りず覚書など組織間の文書交換はできなかったが、海外実習を続けて行くためには、鳥取大学と江原大学校の組織的な理解と援助を得ることも重要と考える。我々は滞在中に、江原大学校の国際交流センターを訪問し、センター長であるYu JaeYoung教授と懇談した。教員および学生の派遣・受入れについて両大学の国際交流センターの協力を得ることも必要となろう。

このように「海外地域調査入門」の提案は、「地域学部国際交流体系化プロジェクト」の一環として、学術交流シーズや教育カリキュラムの掘りおこしから生まれたものである。実際に実施するには今後、実施経費、実施体制の組織化、相手先との緊密な連絡、現地での宿舎や移動手段の確保、「授業科目」としての単位化など多くの検討が必要となる。しかし中国や韓国との活発な交流を指向し北東アジア地域を学部国際戦略に掲げる地域学部において、アジア地域を対象とした海外教育プログラムは検討の価値を持つと考える。鳥取大学の中でも魅力的かつユニークな教育プログラムとなりうる可能性も持つ。今回の報告と検討が学生教育の改善、新たな海外教育プログラムへの展開に役立ち、さらなる地域学部の発展につながれば幸いである。

謝辞

韓国・江原大学校における「海外フィールド演習」は平成22年度鳥取大学地域学部学部長裁量経費の助成を受けて実施された。学生の韓国渡航にあたっては、教育振興尚徳会・地域学部助成会からの経済的ご支援をいただいた。江原大学校の李悠教授には、実習全体のコーディネート、スケジュール管理、実習中のガイド等、実施にあたって物心両面にわたり多大なご協力をいただいた。山林科学大学学術林をはじめ、江原大学校の方々には実習に必要なさまざまな便宜をはかっていただいた。大韓剣道会春川市剣道会の方々にはホームステイなど大きなご支援をいただいた。実施にあたってご協力頂いた全ての方々にお礼申し上げる。

引用文献

Gangwon Province (2010) 江原道公式サイト (日本語版) . <http://jpn.gwd.go.kr/> (2010.9.30)

国立大学法人鳥取大学 (2010) 国立大学法人鳥取大学中期目標. 文部科学省提出資料, 5pp.

永松 大・田川公太郎・筒井一伸・中村英樹・関 耕二・グエン クアン トゥアン (2010) ベトナム・フエ科学大学との学術交流展開に向けて. 地域学論集 7:141-155.

鳥取大学国際交流センター (2010a) 鳥取大学の国際交流 学術交流協定締結校. <http://www.ciatu.tottori-u.ac.jp/jpn/exchange/1/index.html> (2010.4.30)

鳥取大学国際交流センター (2010b) 学術交流協定締結校一覧, 5pp.

(2010年10月6日受付, 2010年10月15日受理)